

稚兒觀音緣起詞書

小 引

一、池戸家所藏稚兒觀音緣起に就いては別項の拙稿を参照せられ度い。今例に依つてその詞書全文を掲げたが、唯これが夙く繪畫叢誌第九十及び九十一號に一度載せられたること拙稿中に述べし如くである。

一、公刊に際しては努めて原本の態を寫したが唯假名の諸躰は凡て現在の活字躰に改め、不明の箇所を□を以て示し、また處々に括弧内にカ、マ、等の傍註を加へたること毎時の如くである。

一、左に本巻中に見る主要なる異體假名を表示する。(渡邊)

ア	ア	イ	カ	キ	ケ	コ
何	以	あり	炎	け	多	
サ	シ	あ	セ	ソ	タ	
け	志	あ	勢	拵	多	
ツ	テ	ト	ナ	ニ	ヌ	
川	テ	ト	未	み	ぬ	
ね	乃	ハ	フ	ホ	マ	
ね	能	を	ぬ	旧	は	
ミ	モ	ユ	ラ	リ	ヲ	
と	老	越	徑	李	茂	

詞第一段（四紙）

（第一紙）

昔我朝日本國大和國長谷寺の程
ちかくやことなき上人まします止觀
窓の中には一念三千の觀をこた
りなく五相成身の床のう
加持の薰修年深く佛法修行功を
つむその齡六十有餘なりしかりと
いへとも現世心安く給仕をいたし佛
法の跡を繼て後生菩提の徳果を
いのるへき一人の弟子なかりけり情
過去の宿善のつたなき事をなけ
いて長谷寺の觀音に三年のあひ
た月詣をくはたつ現世に心安く給仕
し後生には佛法のあとをつかしめむし
かるへき弟子一人さつけ給へと祈精す既
に三年に満すれとも其の勝利一も
なし觀音をうらみなから又かさねて
三月のあひたまいりけりすてに
三年三月に満しけれども更に御示
現なし其時に彼上人我身の宿業を
うらみて抑大聖觀自在尊は極樂淨土
の儲の君普陀落世界の主也大悲闍
提の悲願これふかしされは平等一子
の誓願を我身一人にをいて偏頗御坐
し月は萬水撰はす照せとも濁れる

稚兒觀音緣起詞書

（第二紙）

水に影をうかへす觀音大悲の月輪は
清明なりといへとも衆生の濁れる心水
に影を宿し給はすちからをよはす
我身の罪障の雲のはれさるのみこそ
かなしけれども其曉泣々家ちへ下
向するあひた尾臥の山と申すふもとを
する程に十三四許なる少人の月の
良を花の粧まことに嚴くむらさき
の小袖に白練貫をよりかさねて
朽葉染の袴の優なるに漢竹の横笛
心すこく吹きならしたけなる簪し
もとゆいをしすへらかして比は八月十八日
の曙かたに露にしほたれたる氣色
にみえて春の柳の風にみたれたるよ
りもなをたをやかに見給へりかの上人
これをみて更にうつゝともおほえす
魔縁のへむするかと思けれともち
かくたちよりて少人にとひたてまつるやう
抑いまた夜のふかく候にかゝる山野に
只一人たゝすみ御坐御事たゝことな
らすおほえ候いかなる人にて御坐候そと申
に少人答ていはく童はこれ東大寺の
邊にいしか聊此程師匠をうらみたて
まつりて夜をこめて足にまかせて
罷出て候なり抑君は何なるところに
御坐候そ且は僧徒の情はさる事にてこ

（第三紙）

（第四紙）

そ候へあはれくしつれ御坐して中童子
にも召仕せ給候へかしたのみたてまつら
はやと申されければかの僧悦て申様定
て子細御坐らむ是非の子細をは暫く
聞てやかて御共申へしとて我宿坊へ
相具したてまつりて下向しけり僧なの
めならず悦て明し暮しけれともかの
少人のゆくへを尋ぬる人もなし上人の心
にたかふ事更に侍らす詩歌管絃に
もならひなし偏に觀音の利生とのみ悦
て年月ををくりけるほとに

繪第一段(六紙)

(第五十紙)

詞第二段(五紙)

(第十一紙)

三年と申す春の暮に俄にかの
少人病惱をうけ御坐けり四大日々に
衰て萬死一生に成し時彼少人上人の膝
を枕にし手に手をとるくみ顔にかほ
をあはせて互に別を惜給けるに遺言
實に哀に覺抑此の三年の程慈悲
の室の内に日をくらし忍辱のふすま
の下に夜を明し朝夕に慈訓をうけ
し事何の生にか忘れむ設老少不定
の習なりとも我身なからへて御身先
立給は、没後の御孝養をも我身いき
て申はやとこそ思候つれ思空く

相違して先立たてまつる事のみこそか
なしけれ師匠は三世の契と申せは後
世には又あひたてまつらむ抑我身息絶
たましひ去なは龍門の土にも埋ます

(第十二紙)

野外の煙ともなさずして棺の内に
收て持佛堂に置いて五七日を過てあ
けてみるへしといひもはてす息絶ぬ
魂去て空北^(マ)芒の露と消給へり其時
上人の心中せむかたなし鳥は死とて
は其聲やはらかに人は別とては其詞
哀なりさらぬたに詞たにも遺言

と思は悲にこしかた行末の事かきく
とき申されけるにいと哀も切なり
愛別離苦の悲は人ことなれとも此
なけきはためしすくなき事ともなり
春の朝に花をみる人散別を悲み
秋の暮に月を詠する客陰る空を
恨凡三年三月のあひたの長谷寺の參

詣の驗とおほえて寂愛たくひなし三年
三年の程あひなれて俄別て歎しも
ことはりなり月にたりしおもかけ何

(第十三紙)

雲にか隠し花のことくなりしよそを
ひいかなる風にかさそはれけむ老少不
定の涙の衫と何の時に乾かむ師弟別
離の思何の日かやすまむ哀なるかなや
老をひたるは留り幼なるは去る青花

のちり紅葉のつれなきにたくふ本の
しつく末の露にあひにたりなくく
さてあるへきにあらねは入棺す遺言ま
かせて持佛堂にをきて佛事をこたり
なし近里遠山の大衆集て今此の法花經
を一日の中に書たてまつり供養して彼の
菩提に廻向す供養の說法はてしかは彼上人
思のあまりに棺の蓋をひらきて見給へは
梅檀沈水の異香普く室内に薫す昔

(第十四紙)

の蘭麝の粧を改て金色の十一面觀音
と現す青蓮の御眼あさやかに丹菓の脣
嚴して咲を含迦陵の御音をいたして
上人に告云我是人間の物にはあらず普陀
落世界の主大聖觀自在尊と云我身是也
暫く有縁の衆生を度せむかために
初瀬山の尾上の麓にすみ給へり汝か
多年の參詣懇切に思へは我三十三應
の中には童男のかたちを現して契
を二世にむすはしむ今七年といはむ
秋八月十五日にはかならず汝か迎に來へ
し再會を極樂の九品の蓮臺にこす
へしとて光を放て電光のときく
虚空に上り紫雲の中に隠給き
今奈良の菩提院の兒觀音是なり
此觀音に契をかけて參詣し功を
積人ために利益して正しく童子の

(第十五紙)

稚兒觀音緣起詞書

身を現し給しかるるに近さと遠山
の大衆集て法花大乘を書寫せしか
は内證の功德をあらはし忽に生身の
軀を現し御坐三世の諸佛の出世の本
懷とし給は今此の大聖觀自在尊の
内證の御功德なり

繪第二段(四紙)

(第十六—十九紙)